

伝説的なアメリカのジャズ・トランペッター、マイルス・デイヴィスの自伝で、強烈に覚えているエピソードがある。マイルスが子供の頃、ある日、父親に「ここに〇ドルあるから、渡してきて」と、父の取引先におつかいに出された。はるばる出かけていってお金を渡したら、言われた金額に足りない。もう一度家に取りに戻る羽目になり、父親にお金が足りなかった、と文句を言ったら、父親は「なぜ私がおまえにお金を渡した時に、言われた通りの額があるかどうか確かめなかったんだ？」と逆に叱られた、というのだ。

お金がモニター上のただの数字のやりとりになってから久しいが、それと同時にモノやサービスに正当な対価を支払う、という意識も希薄になってきているような気がする。

私はクレジットカードを持つてはいるものの、めったに使わない。買い物も飲食も、可能な限り現金だ。長らく現金主義でやってきたが、コロナ禍もあって非接触が標準となり、このところやたらと分が悪い。電子決済優先、という店も増えてきた。世間的にも、未だに現金を使う割合が多い日本は後進国だ、みたいな言われようである。



絵・江口修平

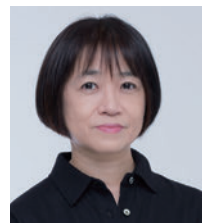
現金主義者の憂鬱

恩田 陸

以前、日銀の歴史をテーマにしたドキュメンタリーを観ていたら、広島に原爆が投下された日に、日銀の広島支店から本店に向けてたった一行、「キンコブジ」という電報を打った、という話に強く胸を突かれた。わずか数日後には、日銀広島支店に間借りする形で各銀行が営業を再開したという。災害が起きると、大量の現金が必要になる。東日本大震災の時にも、日銀は大量の現金を被災地に送り込んだそう。広域で停電し、ATMが動かず、電子決済もできないのだから、当然そうなる。今更ながらの単純な事実であるが、キャッシュレス即ち電気使います、ということなのである。

災害大国ニッポン。震災時の計画停電や、北海道の全道停電、最近も土壇場になってからの電力警報、などなど、ここ一〇年に起きたことを見ていると、どうひいきめに考えても停電に対するきちんとした備えができていないとは思えない。「二〇〇〇年に一度」クラスの思わぬ災害が次々と起きるのを目の当たりにしていると、太陽のスーパーフレアによる磁気嵐で全世界が数年間停電、というものになら現実味を帯びてくる。願わくば、シアに入念な複数の備えをした上で、キャッシュレスを奨励していただきたい。

おんだ・りく●小説家。1964年生まれ。92年『六番目の小夜子』でデビュー。『夜のピクニック』で吉川英治文学新人賞と本屋大賞、『ユー・ジニア』で日本推理作家協会賞、『中庭の出来事』で山本周五郎賞、『蜜蜂と遠雷』で直木賞と本屋大賞を受賞。その他『木曜組曲』『禁じられた楽園』『木浅れ日に泳ぐ魚』『消滅』『ドミノ in 上海』『スキマワラシ』『日曜日は青い蜥蜴』『灰の劇場』『薔薇のなかの蛇』『愚かな薔薇』『月曜日は水玉の犬』など著書多数。



写真提供：徳間書店